
ヴァンパイアの魔導書

藍原 流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイアの魔導書

【Nコード】

N8997M

【作者名】

藍原 流星

【あらすじ】

なにかきはら
榊原 翔は大山第一高等学校に通うごく普通の成績優秀な生徒。

ただ、翔は空想が嫌いで、怪奇現象や怪物、果ては神様までも信じない程に眉唾ものの空想が嫌いなのだ。

そんな彼は黒いフードを深く被った少女を助ける。そのお礼として、彼女は黒魔術を見せると言った。

魔法なんて現実には存在するはずもない、そんな翔の思い込みは雲の魔物に悉く打ち碎かれ、自室に戻ればパートナーは既に事切れていた。

さらに自分はヴァンパイアであることも告げ、翔の首筋に容赦なくかぶりつく。

草食系と吸血鬼が織り成す、面白くてちょっと切ない（が目標の）ファンタジックなラブコメディー！

プロローグ 少年と黒魔術師

彼は何気なく通いたての運動場を散策していた。

彼が通う大山第一高等学校は、デイズニールゾート並みの敷地に人工芝生が隙間無く敷き詰められている。ただ、それだけ。ともすれば地平線も見えるだろう。

しかし、今朝配布された生徒手帳を使えば、何もない人工芝生からバスケットやテニスコート、自動販売機も出ればトイレも出るし、更にはコーヒークップから、なんとジェットコースターまで出る始末。そのくせ、試験は無いし、入学料、授業料も0。逆に、月に五万はくれる学校である。

ただ、推薦がとても厳しく、「これなら、普通に受験すれば良かった」と嘆く者はかなり多く、ニートの多くはここで落ち、挫折したからだと噂される程だ。

そんな推薦を軽々とクリアし、大山第一高等学校の生徒になった人物がいた。

彼の名は、さかきばら かける 榊原 翔、成績は五本の指に入る程の秀才、運動神経も抜群。正義感も人一倍強く、同姓からは信頼され、異性からは幾度となくプロポーズを受ける好青年である。
ただ、恋愛にはかなりのオクテで、近年よく見る、典型的な『草食系男子』である。

そんな翔が何気なくふらついていると、ある集団にでくわす。

「オラ、黒魔術師さんよ、得意の黒魔術で魔導書を取り返して見ろよ！ ハハハハハ！」

どうやら、五、六人の集団で黒いフードを被った少女を虐めているようだ。その内の一人は黒い書物を持っている。

「呪ってやる、呪ってやる、呪ってやる！」

少女は黒い書物を持った不良を睨んでいる。それこそ、呪い殺すかのように。

それを見兼ねた翔は、集団の中に話って入り、少女を庇うように立ちふさがる。

「誰だよ、テメエ」

「通りすがりの一年生だよ」

集団の一人、リーダー格の不良が「生意気だ、殺っちまえ！」と叫ぶ。集団は少女を虐めるのを止め、一斉に翔を襲う！

翔は構えると、全員の的確に急所を当て、十秒もしない内に全員を悶絶させる。翔は周りの安全を確認した上で、

「大丈夫かい？」

と言いながら立ち上がらせる。ついでに不良の手から黒い書物を取り戻し、手渡す。

少女は涙目で、

「私とパートナーになって下さい！」

と、自分の思いの丈をぶつけてきた。翔は困った顔で、

「いや、ごめん。僕には既にパートナーがいるんだ」

と、やっぱり断るが、少女は引き下がる気はないようだ。凄い形相で翔に迫る。

「あ、あの！ 私は黒野くろの 舞まいって言います。見ての通り、黒魔術

師です。あ、黒魔術と言うのは、人を呪い、調子を悪くしたり、殺したりして、悪魔や死神を喚んで、誰にも分からずに惨殺することができます」

「あ、ああ、榊原 翔です、どうぞ宜しく」

と適当に自己紹介を終えると、舞は顔を膨らませ、怒ったような口調でとんでもないことを、口にする。

「……信じてませんね？ いいです、じゃあ、こうしましょう。私が、

あなたのパートナーを呪い殺します。そしたら、素直に謝罪し、『契約の口付け』を交わして貰います。良いですよ。呪いなんてあり得ないんですから」

翔はその言葉に、妙な威圧感を感じ、二、三步引き下がろうとするが、動けない。翔は益々怖くなり、心から逃げ出したいと思った。

「無駄ですよ。そこには、移動不可の術式を組んでありますから。じゃ、今から、悪魔を召喚して、あなたのパートナーに関する何かを取ってきてもらいますね」

数分後、悪魔が召喚され、さらに数分後、パートナーの髪の毛らしき物が舞の手元に置かれる。

「準備は整いました。今から簡単な黒魔術で、あなたのパートナーを呪い殺します」

そう言うのと、舞は何やら不思議な魔法陣を描き、その中心にパートナーの髪の毛を置いた。

舞の随所に、骨で作られたアクセサリーを見つけ、翔の恐怖心を、さらに掻き立てる。

そして、舞は何やら、呪文みたいな言葉を淡々と口にしていく。翔の心はもう、潰れそうだった。

「終わりました。あなたの部屋に戻ってみてください。きっとあなたのパートナーはベッドで冷たくなってるはずですから」

「はい、戻りたいのですが、この術式のせいで、動けないのですが、舞はクスクス笑い、

「動けないなら、あなたは喋れないはずですよ。あなたは動けます。さあ、確認しにいったらっしゃい」

と言った。その時には翔はその場には居らず、舞はふふふ、と笑っていた。

ACT・1 黒魔術師の口付け（前書き）

恋愛ってジャンルはなかなか難しいですね。

そもそも、これって恋愛というジャンルに入るのか？ って考えは捨ててください。ラブとコメディの狭間にありますから、この作品は。

ACT・1 黒魔術師の口付け

翔は自分の部屋の周りを駆け回っていた。

自分の部屋がわからなくなった、という訳ではない。

さつき目の前や我が身に起きた様々な出来事にショックを受け、思考を整理する為に駆け回っているのだ。

（し、信じられない……、いきなり動けなくなってしまったり、何か猫みたいな悪魔が現れ、数分後に髪の毛を運んできたり、この学校に入学するんじゃないかった！）

だが、恐怖で頭がいっぱいのため、整理するのはしばらく無理か。

そうやって駆け回っていると、不意に乾いた音を慣らしながら、一つの扉が開く。翔はさながらギャグ漫画のごとく扉に激突し、「うぎゃっ！」と言う奇声を上げながら、仰向けに倒れた。

「痛いなあ、すいません。何か興奮してて——」

そこまで話して、ふと自分の部屋の扉について思いだす。

あれ？　　そういえば、ドアノブは左開きだったはず。なのに、何故に自分は人とぶつからないんだ？　　おかしい。これまた怪奇現象なのか？

考えがそこに至ると同時に震え出す。

そう、翔は臆病者なのだ。

物音一つしただけで、周りを見回し、音源を確かめるまでは元の作業に集中出来ないくらいなのだが。

ならば、何故翔は不良から少女を救ったのか？

それは、もう一つの人格の存在にある。

翔の体には翔の他にもう一人、聡さとしという人格が存在し、不良から少女を救うときは聡にバトンタッチし、ボコボコにしたわけだ。

“情けねえな、翔。そんなんじゃない夜の墓場で子供が道に迷った時にや、助けてやれないぜ？”

（随分と凝ったシチュエーションだね。まず有り得ないと思うけど）

“ どうか？ 世界は広く、人生は長い。俺は喧嘩とか、暴れるものだけ引き受けるだけで、他のトラブルは翔が引き受けるってことになっているからな。それと、翔、翔の部屋で翔のパートナーが不自然に倒れているぞ？”

（まさか、どうかしたんだろうか？）

“ 俺の出る幕じゃないな。さあ、行ってくるんだ。翔”

翔は「分かってるよ」と呟き、パートナーの所へ駆け出した。

「葛城さん！ 大丈夫ですか！ 葛城さん！」

この少女——葛城かつらぎ蓮れんはパートナー決めパーティーで、一人おどおどしている翔を可愛いと思い、声を掛けた、明るく、陽気で、天真爛漫な少女だったが、既に事切れている。

「嘘、そんな、絞殺された痕が無ければ、刺殺された後の血溜まりもない。いったいどうやって？」

「それは、私が呪い殺したのですよ」

翔は声がした方に怯えた様子で振り向く。そこには蠱惑的な笑みを浮かべる黒野舞の姿があった。「の、のの、呪い殺したって本当なんですか」

「うん、もうしっかりと、前髪をみてください、ぱつつんになりますよね？」

「…… 本当だ。でも、これはこれで可愛い——あいた！」

頭を殴られた直後に翔が振り向くと、何か不気味な杖を振り回している。

「誰がそんな目で見て良いっていったの！ 呪い殺すよ！」

翔はすかさず土下座する。オカルトはかなり嫌いなようだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

土下座しながら謝罪する翔を舞は不気味な杖でポカポカ叩いた。

ひとしきり叩き、満足した舞は、取りあえず翔を黒魔術で立たせ、頬を何となく掴み、何となくいじくり始めた。

「いだい、いだだだ、やへてくははい（止めてください）！」

「えゝ、いゝじゃん、面白いし」

「ひ、人をおほちゃにしいでくはさい！」

翔のその言葉に、舞はにたーつと笑う

「へへん、そんなことがいつまで言えるのかな？」

すると、舞は翔の頬を優しく包み込み、目を瞑る。

割と童顔な舞がこのしぐさを見ると、まるで幼稚園児がキスをせがんでいるようで、大人の魅力とはまた別な魅力が生まれてくる。

そういう魅力、いや、そもそも女自体が苦手な翔は、一瞬で上がりきってしまう。

「いや、あの、すみません、自分、そういうのは心の準備が必要で、それに、まだ付き合つてすらいのに……」

「じゃあ、キスから始めましょ。そういうラブストーリーは、今時珍しくないよ」

舞はこの上ない、無垢な笑顔を見せる。翔は息をする事すら忘れ、その笑顔に見とれていた。

そして、舞は唇を再び突き出す。あとは自然な感じで唇を重ね合わせる。

こうして、二人の恋愛はキスによって、始まりを告げるのであった。

ACT・1 黒魔術師の口付け（後書き）

ヘタレと黒魔術師の恋愛はまだまだこれからです！

今後もしっかりお願いします！

ACT・2 黒魔術師の正体（前書き）

月詠・MOON PHASE・というアニメをご存じでしょうか？
舞を吸血鬼にしたきっかけです。

ストーリーとしては、ヴァンパイア少女と靈感がないのに心霊写真ばかり撮ってしまうカメラマンが出会い、母を捜しながら、行く先々でドタバタ（イチャイチャ？）活劇を繰り広げる、といったもの（第四話まで見て）。

ヒロインがとても可愛くて、ちょっぴり上から目線だったとしても、子供のような容姿と、無垢な笑顔を見る度に、

「頑張って良かったな」
と思える訳ですよ。

はあ、もう少し妹が可愛くて、呼び捨てではなく「おにいさま」まではいかなくても、せめて「兄さん」とエドワード・アルフォンスのように呼んでくれれば……。

今のは愚痴です。本編をどうぞ。

ACT・2 黒魔術師の正体

あの無理矢理としか言いようのないキスから一時間、翔は未だに震えていた。

「初めてのキス、初めてのキス、初めてのキス……」

そんな翔に母性本能が働いたのか、舞は後ろから優しく抱き締め、安心させようとする。が、逆に硬直し、口から半分くらい魂が出てしまった。

すかさず、舞は出かかっている魂を無理矢理押し込み、安心させるために距離を取って、冷静を装うために余裕を見せつけた。

「へ、へえ、キスしたことないんですか。おこちゃまですねえ。人間は中学三年生の時に初めてのキスを交わすとか聞いたんですけどねえ」

大概の人はここで、

「“人間は”って何！？　もしかして、ヴァンパイア!？」

などとツツコミを入れるものだが、ファーストキスで完全にパニックっている翔は、

「そういうあなたはどうなんですか!？」

と聞き返してしまった。とことん免疫がない翔である。

舞もやってしまった……。またハンターに追われる日々が……。、な
どと思っていて、拍子抜けしたのか、

「いいえ、ヴァンパイアである私はこれという人以外にはキスどころか、口付けさえ許しませんから」

と、自分をヴァンパイアであることをあっさりと告げ、ニカツと笑ってしまう。その前歯の左右二本横、そこには本来、犬歯が生えていなければならないスペースに、犬歯に似ているが全く違う、獣の牙が生えていた。

舞もやりすぎたと、『こんなおニブさんなら気付かないよね』と思
っていたくせに小声で呟く。

大概の人なら、例え翔のように問い返しても、背筋が凍り付き、一目散に逃げて行くだろう。

しかし、少し前のキスで完全に混乱し、なおかつ、伝説とかそういうものを信じず、シスターさんの前で、

「そんな人がいるわけじゃないじゃん、バーカ！」
イエス・キリスト

と幼少期に言つてのけたこともある翔は、例え伝説が目の前に現存していたとしても、

「ヴァンパイア？ いるわけないです。あれは東ヨーロッパのおとぎ話にすぎないのですから！」
と言い、存在を全否定する。

しかし、

「そうですか。この牙を見て、まだ信じないなんて、なんておニブさんで強情っぱりなんでしょう」

その強情さが、

「いいです。こうなったらあなたの血を吸い、『血の契約』を交わし、私の下部しもへとなつてもらいますから」

時に、仇となりえるのだ。

「下部って何ですか！ 有り得ないですよ！ そんなことしたら、憲法第十八条《奴隷的拘束及び苦役からの自由》に反しますよ！ ってうあああつ！」

舞は翔を押し倒す。ちなみに現在の時刻は午後6時30分、この頃、周りの部屋から、男の叫び声と、女の嬌声が聞こえ始める時刻だ。それに右隣の部屋から、

「やめろ！ 止めるんだ！ 香織！」

と言う声が聞こえ、間髪いれずにとてつもない断末魔が聞こえてくる。

向こうもこちらと同じような状態になっているのだろう。

（お気の毒に、香織と言う女の人に襲われている男の人、そして、僕！）

次の瞬間、首筋に牙を立てられ、その牙が徐々にめり込んでいく。

普通、こんな事されたら激しい痛みには耐えかね、激しく暴れ狂う筈だが、どうゆう訳か、舞に噛みつかれても、翔は痛みを感じられず、そればかりか甘美な刺激が体中を駆け巡り、抵抗することは疎か息をする事さえ忘れ、甘美な刺激に酔いしれてしまう。そのためか、自分で思考する事が出来なくなっていた。

舞は翔が自分で立つことすらままならないことに気付き、さつき生まれの使い魔の猫、カタラを使って仕方なく立たせた。

「お母様が言っていた通りですわ、“血を吸われたものは禁断の甘美な果実を口にしたかのような感覚に陥り、結果的に私の言うことだけに聞けなくなる”って。試しにキスしてみても、それもとびつきりの」

翔の目が赤く光り、平淡過ぎる声で「はい」と答える。その声は、まるで魂をどこかに落としてしまったかのように、それは操っているのだから、当然と言えば当然だが、表情も、感情も何一つなく、味気ない翔に成り下がってしまったようで、嫌だと思った舞がいれば、逆に浮気もされないし、私だけを見てくれる。おまけに、私がすべきことも全部やってくれて、私の欲求、特に色欲がどうしようもなく膨れ上がったとき、この状態の翔なら、人に頼みづらい事だって易々としてくれるし、最高じゃない！　と思った舞もいる。二つの食い違う感情に葛藤する舞。その間にも翔、の抜け殻は喜ばせるために、下を向いて葛藤する舞の顎を優しく持ち上げ、虚ろなはずの目で顔をじっと見つめる。

舞は翔と目が合い、その目は虚ろなはずなのに、見つめられてる気がして、目をぎゅっと瞑る。

「み、見ないで……ください。とっても恥ずかしい……です」

そこにいる翔は、『とびっきりのキスしてみて』という主人の命令少し前に、ちゃんと契約がされているか確かめるために舞自身が命令したことをしているだけだが、舞はそれさえ忘れ、恥ずかしがっている。

「何を恥ずかしがっているのかい？　愛しい人よ」

それを聞いたとたん、胸がどくと高鳴る、さらに空いている左手で頭を撫でられ、閉じていたまぶたが自然に開く。と、同時に、どくんどくん、どくんどくと心が鼓動のアップビートを刻んでいく。

「あつ、やつ、やあん……」

最初のキスから一時間半、二回目のキスは翔の抜け殻からのちょっぴり大人なキスだった。

ACT・2 黒魔術師の正体（後書き）

どうでしたでしょうか。この作品は、後々一話完結型にしていこうかと思っています、銀魂みたいな。感想をお願いします。

ACT・3 吸血少女の魔術（前書き）

新ヒロイン追加！

やっと更新できた……。

絶好調？ クロスオーバー実施中のD o o r s もお願いします！

ACT・3 吸血少女の魔術

翌日、朝早くに緊急集会が執り行われた。

本来なら月曜日に行われるはずだが、今日は火曜日。執り行われるはずのない日に集会があり、生徒からのブーイングが絶えない。そんな混乱を、

「静まれ！」

の一言で黙らせる、大山大吾朗校長先生は凄いの一言である。

「今回、集会が執り行われたのは他でもない、私の愛娘、大山香織とそのパートナー、大原拓真が行方不明になったことである」

再び、ブーイング。

一方で、

「それがどうした」

と叫ぶ者がいれば、

「早く子供を作らせろ」

と上半身が裸のカップルもいれば、

「金を寄越せ」

と叫ぶ者もいて、かなり荒れている。

そんな状況のなか、声一つ出さず、それなのに意思の疎通をしている、二人の男女がいた。

（すごいですね、このようなことが出来るなんて、舞さんは人間じや無いみたいですね）

（人間じゃ無いです。ヴァンパイアですよ、翔。……、なんか違和感がありますね、いつそのこと名前を『下部』にしましょうか、翔君）

（丁重にお断りします）

先程言ったとおり、彼らの会話に声は使われていない。

これはヴァンパイアと『血の契約』を交わした者が使える、テレパシーの一種だ。

（それにしても、不思議ですね、防犯システムは完璧、原則夏期休業と冬期休業を除いて外出禁止、そもそも、出来ないのに、どうやって外に出たんだろう。不自然だと思いませんか？ 舞さん）
（そんなもの、興味ないです）

「——で、見事に見つけ、私の元へ連れてきた者は、礼として、賞金五億と別荘を何処でも一つ、建ててやる。男や女は好きなだけくれてやる」

『う、五億に別荘うう！？』

体育館全体がどよめいた。何しろ、そんな金は、宝くじでも当たらないからだ。それに加え、別荘と異性も付くため、生徒は性よりも金よりも優先して、誰よりも先に探し出してやると、見つかるはずのない捜し物で躍起になっている。

「さあ、行け。金が欲しくば、性が欲しくば大山香織と大原拓真を探し出すんだ!」

言下、生徒たちが学園の至る所に散らばった。

「……僕達も探しに行きますか?」

「あてもなく捜すなんて、労力の無駄です。それよりかは、翔君をめちゃくちやに虐め尽くした方が楽しいですよ」

「鬼畜……」

「聞こえましたよ? 下部がそんなこと言うなんて許せないですね。命令、私に猛烈なキスをすること。なお、自我は奪わないものとする」

生殺し以外の何物でもないこの罰に、翔の心が折れ掛けたのだが、舞は気づくこともしてない。

香織や拓真を探しても無駄と判断した二人は、とりあえず自室に戻った。――のだが……。

「エグ、エグ、ひどいよ舞さん、ヒック、クスン……」

翔は、心やプライドをめちゃくちやにされ、ダブルベッドの布団の中で泣いていた。

「こんな、僕にこんなことさせるなんて……」

「たかがキスですよ、そんなことは邪眼を使って、キスより上のことをさせられたときに言ってください」

邪眼、という言葉聞いて、翔は泣くのを止め、ガバツとベッドから飛び出して、抗議する。

「邪眼ってなにさ、ゴルゴンじゃないんだから、有り得ないですよ。そもそもゴルゴンなんて存在さえ実在するかわからないんですけどね」

「あんなに激しいキスをさせられたのに、まだ気付かないなんて、どんだけおニブさんなのですか！ 邪眼が駄目なら何で証明すれば良いのですか！」

「一番有り得ないこと。そうですね、そこに横たわる、不幸にも呪い殺された葛城さんを生き返らせたなら認めますよ！」

それを聞いた舞は、そのノルマの簡単さに思わず笑ってしまった。

「あはははは！ そんな簡単な事で良いのですか？ 良いですよ、性格も死ぬ直前にやりたかった事もちゃんと元通りに戻してあげますから」

すると、舞は突然しゃがみこみ、変な模様を描き出した。数分後、舞は変な模様を書き終え、

「その魔法陣に葛城さんに乗せてね、ゆっくりですよ」

と言った。翔は言われるままにすると、舞は翔に離れるよう命令し、次いで何やら怪しげな呪文を唱え始めた。

「蘇れ、彼の者の魂よ、此の地に降りて賜れ、彼の者に生を、彼の者に命を与え賜え」

最後に舞はナイフを取り出し、中指を浅く傷つける。すぐに血が出

て、魔法陣に滴り落ちた。

次いで魔法陣が光り出し、葛城蓮が眩い光に包まれる。

「うわっ！ 眩しい！ 一体どこからこんな光がつ！」

光が収まると、パチリとまばたきをし、むくりと起き上がる。そして、伸びをした後に、第一声、

「おはよう！ 抱き枕君！」

周囲の体感温度を5 くらい下げた一言だった。翔は慌てふためき、舞はプププと笑った。

「でも、なんだか肩が痛いんだよね……。だからさ、もう少し寝ようよ、一緒にさ」

「いつ、一緒に！？ 女の子と一緒のベッドで！？」

翔にとっては女の子と一緒に寝るなんて、別次元にあるようなものだった。そのためか、翔は後ろに声もなく倒れ、そのまま気絶した。

「あはっ、榊原君ってやっぱりかわいい！ ぎゅーってしちゃお、ぎゅー」

蓮は翔をぎゅーっと抱き締めながら、ベッドに入った。

「じゃ、お休み」

だが、舞はそれを許さない。

「ちょっと！ 生き返らせたご主人様を蔑ろにして——」

「ゴメンね、今すごく眠いんだ、もう少し寝てから難しい話をしようね」

そう言うと、蓮はすぐに寝息を立てる。

色々と悩んだ末、舞は二人を起こさないように翔の左に回り込み、背中に抱きついた。

この時、まだ恋人じゃないのにいいのかな？　と思っただのは言うまでもない。

後に翔が目を覚まし、両脇に二人が抱き付いている状況に目を白黒させたのは、別の話。

ACT・3 吸血少女の魔術（後書き）

気付いてくれたかな？

この世界は、doorsの拓真達が元いた世界で、彼らが異世界に行つてからの物語を別の主人公から見えます。

ちよくちよく出るよ？ 拓真達。

ACT・4 少年達の日常（前書き）

最近更新してないなあと思い、1ヶ月ぶりの更新です……、1ヶ月ぶりともあって、かなりグツダグダ……、やっぱり感じる恋愛というジャンルの難しさ！

ACT・4 少年達の日常

入学式から一週間が経った。

この頃になると、大概の人はパートナーを解散し、また新たな異性を探すのだ。

まあ、彼らのように解散せずに三年間を共に過ごすという人もいるが。

―自室 am・07:25―

「起きてください、朝ですよ」

「ふわああ……、朝か……、うわっ！」

少年はゆっくりと上体を起こし、ぱちくりと目を瞬かせ、驚く。目の前に絶世の美……幼女の顔があることに。

「失礼ですね、こんな幼児体型でも年齢は15歳なのですよ？」

「ご、ゴメン、舞さん。以後気を付けるよ」

舞と呼ばれた容姿幼女の女子高生はむう、と言いながら頬を膨らませる。言動や行動はまだまだ子供だなあと思った少年であった。

「でも、やっぱり幼女にしか見えないよねえ」

いきなり横槍を入れた自分と全く逆のナイスボディな成人にしか見えない高校生、葛城蓮の言動に舞は怒りを覚えた。

「それってどういう意味なのかな!？」

「そのまんまの意味よ」

「なにをおおお！」

そして爆発、短気なところはまだまだ子供である

「それが事実よ！！ 素直に、受け止めなさい！」

「うるさい！ うるさい！！ うるささい！！ とりあえず死ねえええええ！！！！！」

どったんばったん、自室で暴れ狂う舞のパートナーである少年、榊原翔は思っ、なんでこの子達は仲良くできないのだろう、と。

「ほら、二人とも喧嘩しないで、ね？」

『うるさい！！』

翔の言葉に気を荒げたのか、二人のハイキックが翔を襲う。しかし翔はしゃがみ込み避けたため、二人のハイキックは空を舞うだけだった。

その際、翔は不本意だが二人の下着を見てしまい、思わず鼻を押さえる。

舞と蓮はその仕草で翔が自分の下着を見られたと悟り、頬を赤らめながら踵落としを繰り返す。

まあ、運動神経がずば抜けて高い翔は軽く避けるが。

「ちょっと、体格が違うからって喧嘩しないでください！ 舞さんは蓮さんには無い無邪気な可愛さがあって、蓮さんには舞さんに無い魔性の魅力があるじゃないですか！」

鼻血を出している翔の説得力がないその言葉で、暴れ狂っていた二人は同時に動きを止め、次いで翔に抱き付いた。抱きつかれた翔は女の子特有の甘い香りと女の子にしか実らない魔

性の果実の柔らかさに意識を飛ばしそうになるが、齒を食いしばり我慢する。

「ありがとう、どれ……じゃない、翔。おかげで大事なものを失うところだったよ。」

「私もよ、だきま……じゃない、翔くん、そうだよね、体格差とか、下着見られても関係ないよね、その人が大好きなら」

蓮は次の瞬間、さらにキツく抱き締める。魔性の果実がさらに潰れ、翔は息が詰まりそうになる。

そんな翔をポカポカ殴りながら舞は翔の腕を引っ張っている。

「私をメチャクチャにしてください！ 翔くんにされるなら、本望です！」

「そんな事はさせません！ 主人として、パートナーとして、一人の人間、もといヴァンパイアとして！」

ヴァンパイアと聞き、蓮の目つきが鋭くなる。

ヴァンパイア？ まさか、この小さな女の子が？ と舞は思ったが翔の、

「早く教室に行こうよ、授業に遅れてしまう！」

の言葉で考えるのをやめ、元の蠱惑的な眼差しに戻ったあと、首筋にキスをした。

もっとも、女の子耐性を全く持ち合わせていない翔には電気椅子の刑に等しかったが。

「いやあ、いきなりあんなことされてビックリしたよ」

「でも気絶は無いです、耐性無さ過ぎです。ほっぺにチュウされただけで感電死です」

「それは……ないよ」

翔は俯きながら否定する。

舞は翔の顔が赤くなっていることに気付き、どうしようもなく翔のことを可愛いと思ってしまう。

それが原因か、つつい抱き締め、首輪にかぶりつきたくなる。が、舞の頭の中の冷静な部分が「今はいけない」と言っているため、仕方なく自重する。

でも、いつか噛みついてやる！ と心に決める舞、一方蓮は舞のヴァンパイア発言を気に留めていた。

（もし舞が本当にヴァンパイアだったとしたら、私はいずれ近い内に滅さなければなくなる……、少しの間とはいえ、舞とは翔を取り合った仲、翔の奪い合いは楽しい。正直もつと激しく奪い合いたい。でも舞を滅したらできなくなる。私は舞を滅することができるかしら？）

“滅する”とは一体？ 蓮には誰も知らないような秘密があるのだ。それがバレルのはまた先の話……。

翔達の通う私立大山第一高校の授業は、原則参加自由である。

周りからそんな高校があってもいいのか！ という声が耐えないが、今は少子高齢化問題が深刻化している状態である。

このままだと日本の社会が崩壊しかねないため、政府が文部科学省に“子供を作るための高等学校案”を提出した。

もちろん文部省は断るが世界一の有権者、大山財閥も絡んできて、東京都に一ヶ所だけという条件で渋々承諾。

こうして、授業を受ける為ではなく、子供を作るために作られた大山第一高校が作られた。

ちなみに、国立じゃないのは、政府より力を持ってしまった大山財閥の責任者、大山大吾郎が自分で管理する、と言ったからだ

さらに、大山高等学校には第三高校まであり、第二が超エリート学校、第三は成績問わず、やる気があり、十五歳以上なら誰でも入れ、三年間で早稲田大学レベルまで育ててくれるイジメとは無縁の学校で、どれも第一高校の校長、大山大吾郎が管理している。

教室 pm・03:35

「授業の参加不参加は自由なはずなのに君達は欠かさず授業に出てくれるなんて、私はとても嬉しいよ。君達是我が校の誇りであり、なにより川村秀治の誇りだよ、榊原君、黒野君、葛城君」

「いえ、まだそこまで褒められるようなことはしていませんよ川村先生」

「そうですよ、学問よりも性欲を優先させるなんて、愚の骨頂です！」

と釘を刺した。両者の浮き上がった腰は椅子に着き、両者の握り拳は再び机に戻る。

「では、ホームルームを始めます。我が校ではクラスに男女各一人、学級委員長と言う役割がありますが、まだ決まっています、まずは学級委員長から決め、その他の役割を決めましょう。自ら学級委員長に立候補する者は挙手願います」

現在教室にいる生徒は36/12人、その中で学級委員長に立候補するような真面目な生徒は殆どいない。

数分が経ち、川村先生は二度催促する。そうして翔の後ろから二番目の男子生徒が、

「じゃ、じゃあ、僕がやります」

と、手を挙げる。顔立ちはある程度整っていて小柄だがやんちゃな雰囲気は無く、寧ろ優しそうな雰囲気が漂う男子生徒だった。

「おお、橘君がやってくれるか。みなさん、橘君の勇気と向上心に拍手を！」

川村先生は拍手を求めるが、翔達を除いて誰も拍手をするものはいなかった。

川村先生は咳払いをし、

「男子学級委員長が決まりました。次は女子学級委員長なのですが――」

「すみません！ パートナーが余りにもしつこいので、制裁していたら遅刻してしまいました！」

川村先生の言葉を遮るように一人の女子生徒が、戸を開け放ち猛スピードで突っ込む。

スレンダーな体格に三つ編みと切りそろえられた前髪、特徴的な丸刈メガネを掛けたいかにも風紀委員会に所属していそうな少し近寄り難い雰囲気を発していた。

「天野君か、大丈夫、この学校は遅刻なんかじゃ誰も責めないから

安心しなさい。話は変わるが、今、女子学級委員長を決めているのだが――」

「是非やらせてください!!」

天野と呼ばれた女子生徒は即答し、翔の後ろの席に着く。

「お、おお、即答してくれるなんて実に素晴らしい、天野君に敬意を表して拍手!」

ちょうどその時、チャイムが鳴り、ホームルーム終了の時刻を告げる。

「……よし、明日は実力テストがあるので各自心の準備をするように、早速で悪いけど天野君、号令をかけてもらいたい」

「分かりました、起立! 礼!」

彼女の号令に合わせ、頭を下げ、次々と自室へ帰っていく生徒。今日の授業が終わったのだ。

放課後の教室 pm・04:00

「私は天野すみれ、少し良いかな?」

先刻、学級委員長となった天野が、翔に話しかける。

「榊原翔です、どうなされましたか?」

すると、すみれは胸ポケットから生徒手帳を取り出し、とあるページの一文を読み始めた。

「生徒心得、第二訓、パートナーは原則一人、と書いていますが榊原君はえーっと……、黒野さんと……、葛城さん、どちらとパートナーなのですか？」

「……えーっと、……両方、かな？」

言葉を失うすみれ。それと対照的に蓮は言葉を次々と紡いでいく。

「でも、それは原則でしょ？　そもそも、この学校に規律があったとしても、誰も守らないんじゃない？」

うぐぐ……と唸りを上げるすみれ。ふと翔の方向を向くと、同じように翔もすみれの方向を向き、目線が重なる。

すみれは顔をりんごのように真っ赤にして、翔達に背を向ける。

一方、翔は何故すみれが背を向けたか分からずに首を傾げている。

「どうしましたか、天野さ——」

「うるさい！　とにかく紀律違反は学級委員長である私が許しません！　わかりまし——」

「あ、足が滑ったあ」

どんがらがっしょーん！　と凄い音を立てながら蓮は翔に倒れかかり、そのまま押し倒す、しかも蓮の巨大な果実が翔の顔に押し付けられ、翔は息が出来ずに気絶してしまう。すみれは顔をまた真っ赤にして、

「は、はは、ハレンチです！　ふ、不純異性交遊です！　い、今すぐ離れなさい！」

と叫ぶが、蓮は悪びれる様子を見せず、さらには、

「やあよ、体と体で感じ合つことが女の子の歡びなんだから、邪魔しちゃダメだよ？」

と嘯き、さらに押し付けたり、ぐりぐりしたりする始末。

ついにすみれは真っ赤を超えて真っ青になり、真後ろに倒れた。

「すみれさんって以外と初心なところがあるのねー。さて、そろそろ自室に戻りましょうか、騒ぎすぎて眠くなっちゃったわ、ふあああ……」

蓮は翔をまるで抱き枕を抱えるように抱き上げ、自室へと続く廊下を歩んでいった。

「まつ、待ちなさい！ 翔は私のシモベなの！ 独占するのは許さない！」

舞もまた、蓮を追いかける。

今日も三人にとって平和な1日が終わろうとしていた。

ACT・4 少年達の日常（後書き）

是非とも感想をお願いします、指摘してくれたら吐血し、十秒間どつぷり沈んだ後、しっかり修正します！

ACT・5 襲来する夢魔と吸血少女の涙（前書き）

お久しぶりです！

今回はサキュバスが登場します。

お察しのうちに、今回はエッチな表現があります。
かなりセーブしているつもりですが、不快感を感じさせてしまった
ら、ごめんなさい。

ACT・5 襲来する夢魔と吸血少女の涙

その夜、少年と二人の少女は寮の自室で布団を被り、とてもコワイ怪談で盛り上がっていた。

「と、いうわけで私のお話は終わりです。楽しんでいただけましたか？」

「楽しめる訳ないじゃない！」

「アハハ……。オカルトなことを信じるようになったら急に怖くなつたよ。それにしても舞さんって怪談の類を話すのが上手ですよね」

蓮が涙目で抱きついていているのを横目に翔は心の底から感嘆の声を上げる。

舞はとても恥ずかしくなり、顔を赤らめて背けてしまう。

「い、いえ、150年生きていたらコワイ怪談とコワくない怪談の区別位は出来ます」

「150年！？ 本当にあなた人間？」

「ヴァンパイアですけど、何か？」

「隠さなくていいんですか？ 舞さん」

どうせ知っているんだから良いんですよ、と舞は首を横に振る。

だが、問題の蓮は口をパクパクさせている。

いかにも信じられないといった眼差しで舞を見ている。

「私の顔に何か付いてますか？」

「い、いえ、何でもないわ。ほら、早く寝ましょう？ 眠たくなってきたから……」

蓮はそう言つて被つていた布団から這い出る。翔や舞も同じように這い出る。

その時蓮が泣きはらしているのに気付き、翔は笑いを堪えきれずに吹き出してしまふ。

蓮は「んもう」と声を漏らし、頬を膨らませる。

「そうですね。そろそろ草木も眠る丑三つ時ですから、お化けに遭遇する前に眠らなければ……」

「止めて！ 聞きたくない！」

「アハハ……。意外と葛城さんはこの手のお話しが嫌いなんですね。じゃあ、僕はそのソファで寝るから――」

『ダメ！』

二人の声が綺麗に重なる。

二つの手が翔を押し倒し、結果的に翔は二人に半分のし掛かられる事になった。

「今日も私と一緒に寝るのよ！ キスだつてしてあげるし、あなたが望むなら、その……、私の初めてもあげるから！」

「コラ！ 私のシモベを誑し込むんじゃないやありません！ ほら、翔さんは私とおねんねして翌朝は貧血に頭を悩ませるが良いです」

「どっちも困るなあ……。それにどちらか選べばどちらかはソファで寝る事になるし、やっぱり僕がソファで寝て、二人はベッドで寝た方が……」

ずり落ちたメガネを正位置に戻し、引きつった笑顔を浮かべる。舞は大いに溜め息を吐く。

「……あなた、サキユバスという悪魔を知っていますか？」

「存じませんね」

「無知ですねえ、後で鞭打ちの刑です。別名を夢魔とするサキュバスは主に男の子の夢に現れ、言葉巧みに誘惑しては性行為をしてごっそりと精気を奪い去っていくいやらしい下級悪魔です」

性行為で精気を奪ういやらしい悪魔。翔は女の子耐性ゼロだが、健全な男子高校生だ。翔にとっては本当に不本意だが、サキュバスをネタにえっちな妄想を繰り広げてしまった。

「鼻血が出ているわよ、翔。えっちなこと考えていたでしょ？ 翔は少しでもえっちなこと考えると鼻血を出すんだから。昨日なんか私のバスタオル姿を見た瞬間に鼻血を吹き出して失神したんだから」
「そうですか、蓮さんのその体型なら仕方ありませんが、問題は私のような幼児体型である私のバスタオル姿を見ても鼻血を吹き出して失神してしまうところにあります。……女なら誰だって良いんですよ、翔は」

「そうでもないわよ、前に熟女な化学の先生がセクシーランジェリー姿で授業に出たでしょ？ あの時翔は鼻血を出さなかったわ。固まってたけど」

「いや、だから何の話をしてるんですか！？」

翔は困惑した声で抗議する。

二人は互いに顔を見合わせ、ふうと息をはいた後、立ち上がった。

「まあ、いいです。寝ましようか。翔はベッドで寝てください。私達は勝手に横に寝ます」

「そうと決まれば寝ましょ！ さあさあ、早く寝ましょ」

「うわ、分かったから、押さないで、押さないでってば」

翔は二人の少女に押され、ベッドに向かう。

そんな中、窓の外の闇夜より翔を監視する、翼を生やした異形が一

つ。

「やっと見つけた……、この学校では珍しい童貞君。^{チェリーボーイ}ラドル しっかりと快楽漬けにして、私専用の性玩具にしてあげるからね！」

そう言葉を残し、忽然と消える異形。

噂をすれば影、とはこのことを言うのだろう。

皮肉にも舞や翔は愚か、退魔師である蓮ですら、まだ異形存在を知らない。

翔はいつの間にか立っていた。

だが、周りが真っ白に塗りつぶされている。

ここは自分の夢の中なのだと思えるのには時間が掛からなかった。

「これは夢……、恐ろしいくらいに殺風景だね」

いつもだったら花畑だったり湖や海だったりするのにな、今見ている夢は翔にとって、夢と言うには余りにも殺風景過ぎた。

「早く元通りの夢にならないかなあ……」

「それは出来ない相談だよねえ」

突如として後ろから声が聞こえ、ゆっくりと振り返る。

そこには口から小さな牙をチラリと見せ、頭からは小さな角を生やし、背中からは翼、お尻からは尻尾……、と絵に描いたような女悪魔が翔に向かって手を振っていた。

「君は……、誰？ 人ではない事は外見から分かるけど」

「そうだよ、私は人間じゃない。私はサキユバス、男の子とエッチ

して根刮ぎ精力を奪い尽くす、性愛の悪魔。お分かり？」

サキュバス。翔は舞の会話に出て来たいやらしい下級悪魔が目の前に現れた事を悟り、即座に背を翻した。

「ごめんなさい！ 僕から大したモノは採れませんから！ お引き取り下さい！」

翔はそう言って全力で走り出した。

しばらく走り、サキュバスの様子を窺い知ろうと後ろを振り向くが、距離が一向に離れない。動いた形跡もないのに。

それどころか、サキュバスは不思議そうに首を傾げているではないか！

翔はがむしゃらに走り続けた。距離はまだ広がらない。サキュバスは遂に動き始めた、が、呆れるくらいに遅い。

それでも、サキュバスと翔の距離は確実に縮まっていく。

「何で！？ 僕は全力で走っているのに！ サキュバスさんは歩いているのに！」

「ヒツドイなあ、名前が分からないからサキュバスさんだなんて。

この際名乗っておくとね、私の名前は夢野瑠璃ゆめのるり、るりちゃんって呼んでね？」

サキュバスの少女、夢野瑠璃がそう言った瞬間、瑠璃が翔に追いつき、後ろから抱き締められる。

サキュバスなだけあって、蓮以上に大きな胸に翔は呼吸が出来なくなった。

「うぐ……、ぐ……」

「あはっ、カワイイ！ 胸を押し付けただけで息が出来なくなるなんて、極上の童貞君チェリーボーイなんだね！」

「は、はは、離れてくれますか？」

「あははははっ！ イヤに決まってるじゃない！ せっかく見つけた、まだ精通すらしてない童貞君だもの、初物をしっかりと頂いて、ちやつかりと快樂漬けにしちゃって、私専用の性玩具ラブドールにしてあげるから」

瑠璃はペロリと首筋を舐める。瞬間、翔の表情が真っ青を超えて真っ白になり、目の前が真っ暗になる。

「あれ？ 気絶しちゃうんだ？ いいよ、今回は搾り取るのを諦めてあげる。でもね、初物はしっかりと頂いていくから、それまで気絶させてあげない！」

「うわあああ！ はあっ、はあっ……、はあ……」

十五年と六ヶ月生きてきた中で最悪の悪夢だった。

気絶しようにも許されず、ひたすらにエッチな事を無理矢理されるという夢。

普通なら完全に堕ちきった意識の中でサキュバス、夢野瑠璃と交わってしまっだろう。

しかし、翔は違った。首筋を舐められた瞬間、何も出来なくなったのだ。交わる交わらない以前の問題である。

それでも痺れを切らした瑠璃は仕方無く無理やり重なって精気を奪ったのだが。

「夢野瑠璃って言ってたなあ、自分がサキュバスだっていう割りに

はたいして何も起きていないじゃないか。精を根刮ぎ奪い去ると言われたから警戒してたけど、杞憂みたいだね」

「いいえ、サキュバスは本当に現れ、翔の初めてをかつさらって行きました。ちゃんと顔が赤いですし、夢精も確認しました」

翔は舞の言葉を聞き、恐怖と羞恥とで顔を真っ青にした。

「……本当に？」

「ええ、るりちゃん、るりちゃんって甘い声で呼ぶところも確認しましたし。これは早急に手を打たなければ大変な事になりますね」

「大変な事って!？」

「『るりちゃん』に精気を奪われ尽くされ、命が果てます」

命が果てます。あなたは死ぬのです。You are die。

ぐるぐるとこれらの言葉達が頭を回り、翔の顔は真っ青を通り越して真っ白になった。

「最悪の場合ですよ、軽くて精神崩壊ですから」

「十分重いよ!」

「授業が始まるわよ、二人とも。ここはとりあえず、授業に出ましよう」

翔は青ざめた顔で教室へと歩を進める。授業の内容なんてとてもじゃないが入るような精神状態じゃなかった。

その日の夜、自室を真っ暗にし、ろうそくを囲んで作戦会議が行われた。

「僕はどうなるの!？」

「落ち着きなさい、翔。慌てたつていい案は出ませんよ。とりあえず、十字架と牛乳で予め付け入れられないようにして、もしもの時はコレを突き刺すの」

そう言つて舞は翔に一振りの短剣を手渡した。

鞘から抜くと、刀身がろうそくの光に反射して藍色の輝きを迸らせている。

「こ……、これ真剣じゃないですか！ そんな物で刺したら夢野さんは確実に死んでしまいます！」

「彼女はサキュバスですよ、真剣で胸を貫いただけじゃ死にません、傷すらすぐに再生します。ですから、この剣に悪魔払いの術式を組み込みました。この剣でるりちゃんとやらを突き刺せば翔の夢から彼女を追い出すことが出来るはずです」

えっへんと言わんばかりに胸を張る舞。

翔はそんな舞を抱き締め、嗚咽を含む声で感謝の意を述べる。

「ありがとう……!! 本当にありがとう! こんな無力な自分を……!!」

「泣くのはサキュバスを追い出した後です、今日は寝ましょう」

翔はうんと頷き、ベッドへと向かう。蓮は舞の妖力で眠らされ、親指を吸っていた。

「ごきげんよう翔君。今日もいい夢ね」

「僕には殺風景に感じるんだけどね、夢野さん」

真っ白な夢の中で、再び二人は相見る。今宵の翔は抜かりない。

「どうやら、この様子じゃ十字架も牛乳も無意味だったみたいだね」
「どれも迷信よ。私にとって十字架は玩具、あ、お皿にあったミルク、あなたの本物だったら今日は満足して取り憑かなかったかもね？」

そう言つて、瑠璃はうふふ……、と笑う。

その隙に翔は自分の内なるもう一つの人格、聡に語り掛ける。

（聡、出番だよ。僕達で僕達の夢を守ろう！）

（おお！ 感じたくない快楽を感じるのは、もうゴメンだからな！）

体の支配権を聡に明け渡し、聡は懷から退魔の短剣を取り出す。

「おい！ 俺の精神を蝕む、淫魔さんよ！」

「口調が急に……二重人格ですね？」

「今日という日を忘れるな、今日があんたの——」

翔の体躯に確かに青とも赤とも取れる、オーラが立ち上がっていた。瑠璃は一瞬びくつとしたが、すぐに構え直す。

「へえ、男の子がサキュバスに楯突くのねえ、これはちょっとお仕置きと調教が必要みたいだね！」

「——命日だ！」

瞬間、短剣の鞘を真上に抜き放ち、逆手に持って瑠璃に突進しようとする……、が。

「今日は触手責めね……」

瑠璃がそう呟いた瞬間、四方八方から得体の知れぬナニかが四肢や腰に纏わり付き、文字通り手足も出せない状態となった。

「ど、どうなつてんだよ!? コレ!」

「私は夢魔だよ? これ位は当然の事じゃない? さあ蠢け、私の手足となりて彼の者に魔性の快楽を与えよ」

瑠璃はそう言つてパチンと指を弾くと翔に纏わり付く触手達がウニョウニョと動き出し、翔の体の敏感なところを撥り始める。

「くっ……、うう……!! 離せ、コノヤロー!」

チエリーボーイ

「嫌よ、翔君は大切な大切な童貞君だもん、しっかりと搾り切つてあげるからね!」

「ふ、ざ、ける……なあっ!」

「息も絶え絶えだよ? 大丈夫、直ぐに性玩具ラブドールにしてあげるから」

「ああああああっ! はあ……、はあ……、またか……」

翔は相当に落胆した。

死ぬことも許されぬ快樂地獄、生き地獄とでも称すれば良いだろうか。

昨晚の間に万死に値する程の恥辱と屈辱、触れることすらままならなかったという雪辱をこれでもかという程味わされた。

「そう、気を落とさないで下さい、翔。ついさっき対サキュバス用

の退魔術式の儀式を終えましたから」

「退魔術式の儀式？」

そうです、と舞は最寄りの椅子に座り込み足を組む。

「万術にとって魔術と言うのは儀式が必要なのですよ。儀式に必要なキーアイテムは入手にそれなりの代償が必要で、例えば、炎の魔法を操りたいなら富士山のマグマの奥底にある灼熱のルビー、水ならマリアナ海溝の奥深くにある海淵のサファイア、風ならエベレストの頂上の何処かに鎮座する烈風のエメラルド、土なら地球の中心にある大地のトパーズ、光なら白夜の北極点にある輝光のオパール、闇なら極夜の南極点にある闇夜のラピスラズリを手にする必要があります」

「普通の人には無理だね……」

「だから街に魔術師が溢れかえらない訳ですよ。一応奇跡が起きれば一般人でも習得出来る魔術がありますが」

「どんな儀式？ 僕でも可能性はあるの？」

「一般人でも魔術が使える可能性を与えるツール、それが魔導書です。黒魔導書と白魔導書があるのですが、翔にはどちらも無理ですね。少しでも目を通せばモロい人なんかアツと言う間に精神崩壊が起きます」

翔は思った。魔術は舞さんに任せようと。

自分は無理して魔術を会得する必要はないと。

「本題に戻ります。今回、対サキュバス用退魔術式を発動させるためには翔が初めてサキュバスに精気を奪われた精力の残滓と、それが付着していた下着を燃やした灰を使うことが必要でした」

「それってまさか……」

「ええ、翔の初めての夢精とそれが付いてた翔のトランクスを使わ

せて貰いました」

翔は顔を真っ赤にして縮こまる。
自分の体液をまさか術式の代償に支払われるなんて、思いもしなかったのだ。

「二人共！ 授業の時間よー！」

「じゃあ、行きますか。授業に遅れますよ？」

「う……、うん」

翔は重たい足枷を付けられたような足取りで教室へと足を運ぶ。
今回も授業が頭に入らなかった。

「こんにちは、もう三度目だよねえ、これも。もうセフレと言える関係じゃないかな？ 私達」

「まだ僕は夢野さんの手に落ちた訳じゃないよ」

「でしょうねえ。でも今宵翔君は完全に私の手に落ち、私の肉体を求めるようになる。絶対に、よ」

ツカ、ツカ、とハイヒールが地面を叩く音を響かせながら、瑠璃はお尻を振り振り翔に近付く。

翔は珍しく鼻血を出さず見とれている間に瑠璃は両手で翔の顔を挟み、自らの唇を翔のそれに押し付けた。

それだけでは飽き足らず、瑠璃は翔の口内に舌までねじ込んだ。

翔は抵抗しようとしたが、甘ったるい空気に当てられたせいか体が痺れて動かせなかった。

瑠璃は唇を離し、妖しい目線で翔を睨め回す（ねめまわす）。

「キスされるの、嫌じゃなかったでしょ？」

「そんなわけ、ないよ！」

「嘘ばかり。あなたの心臓が早鐘を打っていたのがよく聞こえたのよ？ それに、今でも顔を真っ赤に染め上げているしね。鏡貸してあげるから、自分の顔を見てみなさい？」

そう言つて、瑠璃はハート型の手鏡を作り出し、翔に投げ渡す。

翔はその鏡の中の自分の顔が赤らんでいるのを確認すると、手鏡を取り落とし、酷く落胆する。

「これが、今の自分……」

「そうだよ、翔君。翔君は私のキスでドキドキしてムラムラしていたんだよ。それは翔君が私の手に堕ちつつあるということ、トドメをさしてあげる。お口から翔君の意思なんかを一つ残らず吸い取るの。これで私専用性玩具^{ラブドール}の完成よ！」

「そうはさせません！」

舞の声が聞こえた次の瞬間、周りが真っ黒な闇に塗り潰されて二人の足元にも闇が侵食し始める。

「ぐう……う。対サキュバス用退魔術式……が、発動したんだね。僕まで巻き添え受けてる気がするんだけどな、あつ、ぐつ……！」

「……、翔君のお友達には黒魔術師がいたのね。こんな痛い退魔術式は初めてよ、まだまだ未熟なのね、翔君、痛いでしょう？ 良かったら、目を瞑って欲しいの」

「え？ あ、うん……」

翔は言われた通りに目を瞑った。

瑠璃はそんな翔がとても愛おしく感じ、優しく抱き締めて呟いた。

「私が少しでも痛みを和らげてあげるから」

翔はその言葉の真意が分からず、顔を上げて目を見開く。
次の瞬間、瑠璃の顔が迫り、唇に柔らかくしっとりとした何かが重
ねられる。

翔はそれが唇だということを悟るのにさほどの時間も掛からなかつた。

（い、意思を吸い取られる！）

そう思い、翔はじたばたと抵抗する。

瑠璃はそんな翔をキツく抱き締め、身動きを封じた後、頭に直接語りかける。

（大丈夫、翔君の意思は吸い取ってない。私はただキスがしたいの）

それを聞き、安心した翔は、無意識の内に瑠璃の腰へと腕を回した。
翔の事がさらに愛おしく感じた瑠璃は先程と同じように翔の口内に舌を入れる。

翔はすべてが幸せに感じられて、気付けば痛みはだいぶ軽くなっていた。

二人は全てが闇に吞まれるその時まで唇を重ねた。

「……………！ 夢野さん！」

闇に痛みと共に引きずり込まれる夢を見たせいか、シャツが汗でぐっしょりとしている。

そんな事は翔にとって些細な事に過ぎず、急いで飛び起きて辺りを

見回す。

ソファアの近くで光る魔法陣の上で苦しむ瑠璃に弓矢の照準を合わせる巫女装束の蓮とその近くで精神統一している舞を確認する。

「や、止めて下さい！」

「あ、起きた。翔が」

「か、翔が!？」

素つ頓狂な声を上げる蓮と精神統一を中断してこちらを見る舞。

翔が起きた事があまりにもショッキングな出来事だったのかつがえた矢をうっかり離してしまい、結果的に矢を瑠璃に放ってしまう。

これでもし舞が精神統一を中断していなければ瑠璃は間違いなく退魔の聖矢に貫かれ、瑠璃は息絶えた事だろう。

瑠璃はしっかりと聖矢を掴み取り、投げ捨てた。

翔は瑠璃の前に立ちはだかる。

「二人共！ この子を滅するのを止めて下さい！」

「なんで!？ この子はあなたの精力を奪い、死に至らしめようとした淫魔よ！ 人間に害を与える邪妖、滅さずにどうしろと言つの!？」

「翔も分かっているはずですが、擬似的な性行為を行い、精力を奪われる恐ろしさを。なのになんで翔はそんな事を言えるんです？」

「可哀想だよ！ 夢野さんも生きるために仕方無くしていることなんだ！ 悪気はなかったんだ！」

「翔君……」

「甘いです！ 翔は人を殺め、血肉を啜るしか生き延びる術を持たない種族にもそんな事を言うんですか!？」

「言うさ！ 人と妖、共存は出来るはずなんだ！」

舞は盛大に息を吐く。どうやら本気で呆れているようだ。

「どうやってですか？ 血肉を啜るしか能のない妖とどう共存していくんですか？」

「それをどうにかするのが魔術でしょ！？ 魔術師なら——」

ガタン！ 舞は拳を叩き付け翔の言葉を遮る。その黒眼は朱に染まり、怒りの業火を連想させる。

「魔術はそんなに万能じゃないです！ 古の魔術師が残した魔術をベースにし、それをそのまま使うか少し改良して使うしかないんです！ 子供臭い魔法少女のように言ったことが何でも叶うような虫の良い魔術なんて、この世には存在しないんです……！ 悔しいけど……、魔術が使えたところで出来る事が少し増えるだけで、まだまだ無力なんです……っ！」

舞の言葉の語尾がかすれる。

その近くにポタリポタリと音を立てて涙が零れ落ちる。

「舞……さん」

「私が魔術を覚えても、実体を無くして死んだお姉ちゃんに戻って来ないし、あの時私を犯した汚らしい男を呪い殺す事も出来ない……っ！ キーとなる髪の毛が、一本たりとも落ちてないから——」

「舞さん！」

翔に名前を呼ばれ、顔を上げる舞。次の瞬間、舞は翔にガシツと抱き締められる。

「どういつ風の吹き回し……です？」

「僕は言い過ぎたみたいだ、確かに人を殺めざるを得ない種族には決断が必要かもしれない、理性のない妖や敵意を剥き出しにする妖

には決断が必要かもしれない。でも僕は信じているんだ、僕と舞さんが一緒にいるように、人と妖は共存出来るって事に」

「……く、翔はどこまでも甘ちゃんです、せいぜい寝首を掻かれないうちを付けることですよっ！」

「うん。気を付けるよ」

「う、ぐう、う、あああああん！ うわあああああん！」

舞は盛大に泣き続けた。

翔はずり落ちた眼鏡も直さずに舞を抱き続けた。

「今回は、翔の顔に免じて、夢野瑠璃を滅するのを止めます」

数時間後、落ち着きを取り戻した舞の口から告げられた。

翔はホッと一息吐き、瑠璃は目から涙を零す。

「良かったね、夢野さん。これからは他の人に危害を加えないでね。僕の精気ならいくらだって上げるから」

「うん、ありがとう。はあ……、良かったわ。私、これからも翔君を愛していてもいいのね？」

瑠璃のその言葉はこの自室の体感室温を一気に20度下げた。

「どういう……事ですか？」

「2日間に渡る情事と、闇に吞まれる前の情熱的なキス。そして、先程のやり取りで私の奥底に眠っていた愛の本能が翔君に照準を合わせたのよ」

そう嘯き、瑠璃は自らの胸に翔の顔を愛おしそうに埋めさせる。

今までは夢だったから鼻血を出さなかったが、現実でこんな事されると、女の子耐性ゼロの翔は鼻血を盛大に吹き出す結果になるのだ。

「そんな、そんな、そんなの押し付けちゃダメえええ！」

「やん、アツいわ！　まるで××みたい！」

「卑猥なこと言つてないで、早く離れるです！」

「翔が、翔が失血死しちゃう！」

「ああ、向こうに川が、おじいちゃんが川の向こう岸から呼んでいる……」

「その川を渡っちゃダメよ！　本当に死んじゃうからね！」

翔の自室がまた騒がしさを増した。

ACT・5 襲来する夢魔と吸血少女の涙（後書き）

次回！ サドなエルフが登場する予定です！

……はい、恋愛的な女の冷戦は第二章で繰り広げる予定です。すいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8997m/>

ヴァンパイアの魔導書

2011年11月13日08時35分発行